

双葉の土、陶芸に

町内合同会社が企画

双葉の土を日常へ。東京電力福島第1原発事故に伴い、県内の除染で出た土壌を保管している中間貯蔵施設が立地する双葉町で16日、地元で採取した安全な土を使って陶芸に取り組みプロジェクトが始まった。放射能汚染や除染土と結び付けられ、負のイメージもある町の「土」。どうすれば本来の姿を取り戻せるか。地元関係者は陶芸に活路を見いだし、双葉の土を日常に根差したものへと昇華させるつもりだ。

陶芸プロジェクトを発足させたのは、町内の合同会社「FUTAHOME（フタホーム）」だ。誰かが双葉の土で陶芸に挑戦できる環境を町内に作り、芸術的な視点から土を安全で創造的に活用するモデルケースにしたいとの思いから企画した。双葉の土は農業で地域を支えてきた豊かさの象徴であり、かつては隣接する浪江町の伝統工芸品「大畑相馬焼」で一時、粘土が使われた歴史もあるという。陶芸に使う粘土は、双葉町で除染が済んだ新山神社の協力を得て、敷地内から中長期的に採取する。専門機関で放射線量を測定し、科学的根拠に基づく安全性を確認した上で、ほかの産地の粘土と調合し、作品制作に使用する。

トフテンは今後、粘土や陶芸機材を運ぶ台車を手がけ、焼き窯も整備する。町のイベントや集会所、住宅地などに出向き「移動式陶芸教室」を開いていく。将来は陶芸家を町内に呼び込み、地域住民と交流してもらいながら作品を制作し、関係人口の拡大につなげることも視野に入れている。



プロジェクトを企画した川上さん

負のイメージ払拭へ

トウレン代表の川上友章さん(23)は、祖母が富岡町出身の縁で約3年前から双葉町と関わり、住民との交流や聞き取りを踏まえて陶芸プロジェクトを立案した。川上さんは「『未完成』が一つのテーマ。最低限の陶芸設備の中で、町民が主体的に関わることでより単なる体験にとどまらずに新たな文化を創出し、陶芸を町の風景にしたい」と思いを語る。同社が制作した作品や陶芸教室で参加者が作った作品の一部は首都圏のイベントなどで販売する予定。日常的に使ったり、飾ったりしてもいいことで、負のイメージの払拭につなげる。中間貯蔵施設にある除染土を巡っては、2045年3月までの県外最終処分と再生利用に向けた国民の理解醸成が課題で、川上さんは「作品を通して県外で双葉の土について考えをきっかけにしたい」と話す。



双葉町の土を調合した粘土に触れ、作品作りに取り組む参加者

▲ 8月17日 福島民友新聞掲載

陶芸プロジェクトは、どのような思いから企画されましたか？

双葉の土は、地域にとってどのようなもので、どのような歴史がありますか？

「除染土の県外最終処分や再利用」に関する国民の理解醸成について、あなたの考えをまとめてみましょう！